



巻頭言

「令和の日本型学校教育」 が求めるもの

「自立した学習者」を育てるためには、従来の規律訓練型教育から脱却し、子どもが各自の判断で主体的・個性的に学びを進めていくパラダイムへシフトする必要があります。



上智大学教授
(文部科学省教育課程部会委員)
奈須 正裕

すべての子どもを自立した学習者に育てる

中教審答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」にもあるように、「子供たちの知・徳・体を一体で育む『日本型学校教育』は、全ての子供たちに一定水準の教育を保障する平等性の面、全人教育という面などについて諸外国から高く評価されている」(p.5) のですが、同時に数々の問題を抱え込んでいることが、新型コロナウイルスの感染拡大によって明らかとなりました。

典型的には「学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、『何をして良いか分からず』学びを止めてしまうという実態が見られ

たこと」であり、「これまでの学校教育では、自立した学習者を十分育てられていなかった」(p.13) のです。

その原因について答申は「我が国の経済発展を支えるために、『みんなと同じことができる』『言われたことを言われたとおりにできる』上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、『正解(知識)の暗記』の比重が大きくなっていったこと、「学校では『みんなと同じことを、同じように』を過度に要求する面が見られ、学校生活においても『同調圧力』を感じる子供が増えていった」(p.8) ことなどを挙げています。

従来の「日本型学校教育」の課題

はずれてはいけない

正解主義

言われたことを
言われたとおりに

同調圧力

自立した
学習者が
育たない



「令和の日本型学校教育」では、これら「正解主義」や「同調圧力」といった従来からの問題を克服し、すべての子どもを「自立した学習者」に育てることを目指します。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」も、そのために求められるのです。

教師を介して知識や経験に出会う学び

したがって、個別最適な学びも協働的な学びも、単なる授業形態の問題として扱うのではなく、いわゆるパラダイムシフトが求められます。ここで参考になるのが、1990年にブランソンが来たるべき情報化社会を見据えて提起した、資料1のようなモデルでしょう。教師があらかじめ正解を一方向的に教え込む「口頭継承パラダイム」という過去のモデルから、1990年時点では教師と生徒、生徒と生徒の間で双方向のやり取りがなされる「現在のパラダイム」への移行が完成しているとされています。

ちなみに、ブランソンはアメリカの学校の現状に基づき、生徒間の相互作用は二次的なものに留まっているとして、わざわざその箇所の矢印を点線にしていますが、日本の授業ならば、堂々と太い実線で表していいでしょう。この点に関して、日本の授業は世界に冠たる水準を実現しているのです。

とはいえ、そんな日本の授業も含め「現在のパラダイム」では、生徒は常に教師を介してのみ、学習の対象である「経験」や「知識」に出会うよう制約されています。たとえば、日本の教師は確かに子どもたちの問いを大切にしてきました。しかし、それさえも「なるほど、みなさんの意見を聞いています、こんな問いが成り立ちそうだね。今日はみんなでこのことを考えてみましょう」といった具合に、常に一度教師を通過し、教師の発問の形で改めて子どもたちに問いかけられるものだったのではないのでしょうか。少なくとも一人ひとりの子どもが、その瞬間

に立ち現れた自らの問いに即応して自由に学びを進めるといった状況が許容されることは、決して多くはなかったように思うのです。

情報のコントローラーを子どもに委ねる

これに対し、ブランソンが未来の学校教育のモデルとした「情報技術パラダイム」では、生徒が教師を介することなく、子どもたち一人ひとりの判断でいつでも自由に「知識データベース」や「エキスパートシステム」にアクセスし、各自が今現在必要とする「経験」や「知識」と出会い、主体的・個性的に学びを進めていきます。

もちろん、学びは「孤立」的なものではなく、生徒相互の間で自発的に生じる豊かで自然な対話や協働を伴いながら展開されます。「現在のパラダイム」では伝達者、ゲートキーパーの役割を担い、情報のコントローラーを全面的に掌握していた教師は、その役割を学びのコーディネーター、ファシリテーターへと大きく変貌させていくのです。そうすると、もはや過剰な権威も不要となるでしょう。今なお、中学の教師が時折折口にする「生徒になめられないことが肝心」といった構えは、学校からすっかり放逐されるに違いありません。

ただ、このようなパラダイムシフトを実現し、個別最適な学びを日常化するには、子どもたち一人ひとりが自在に活用できる情報端末と、ストレスなくクラウドにアクセスできる高速大容量のネットワーク環境が不可欠です。ブランソンがモデルを提起した1990年時点では夢のような話であったと思われるかもしれませんが、これが2022年の日本の学校では、すでにほぼ完璧に実現されています。

これこそがGIGAスクール構想の真価であり、個別最適な学びに際し、答申が「子供がICTも活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいく」(p.17)と語る真意です。一人一台端末がほぼすべての授業で主体的・個性的に使われている学校と、週に何回かのみ、しかも一斉画一的にしか使われない学校の違いは、このようなパラダイムシフトの実現状況に全面的に依存しています。

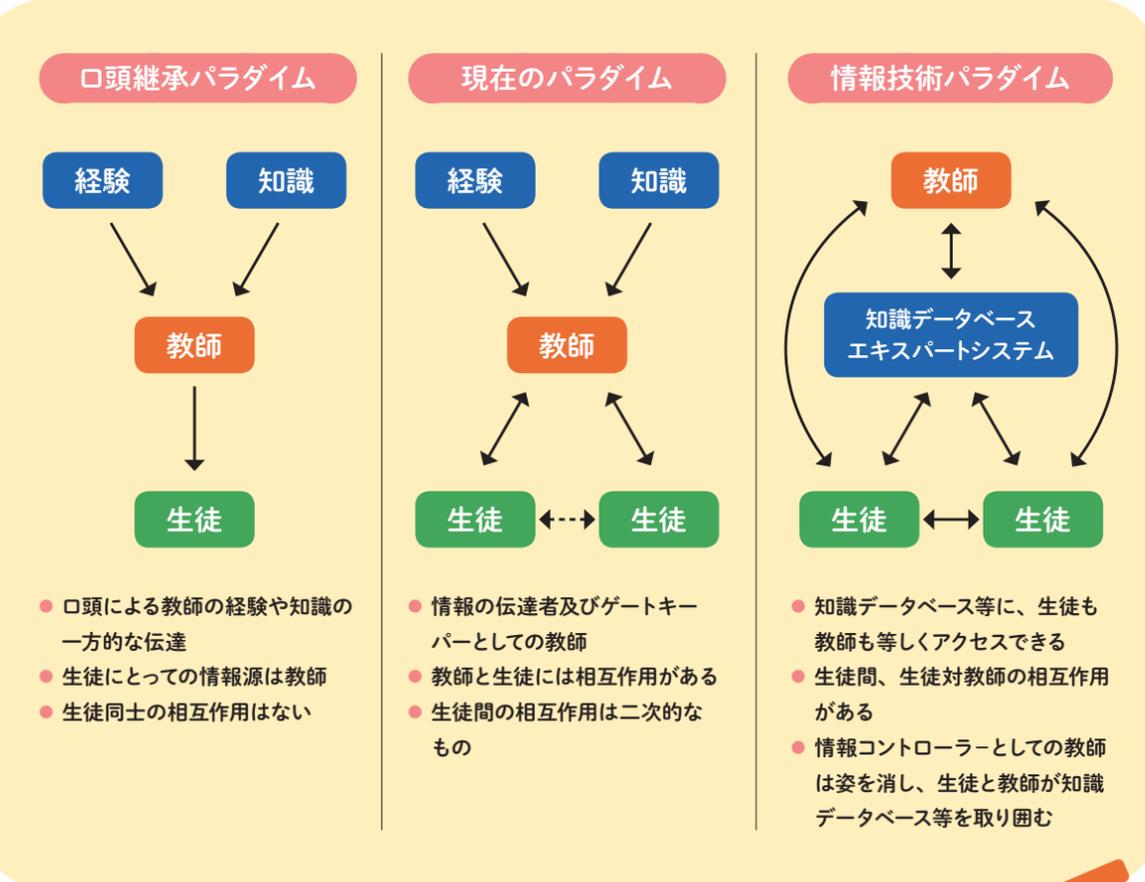
規律訓練型教育との決別

ブランソンは、未来のモデルの中心に「知識データベース」と「エキスパートシステム」を描きましたが、さらに敷衍するならば、学習環境全般とすることも可能でしょう。すると、日本の一般的な幼児教育のモデルになります。

資料2はごく普通の幼稚園の様子ですが、道具も材料も子どもの都合とタイミングで、いつでも自由に使ってよいようになっています。

資料1 学校教育の過去・現在・未来のモデル (Branson,1990)

Robert K. Branson 1990 Issues in the Design of Schooling : Changing the Paradigm. Educational Technology, Vol.30, No.4, 7-10.



教師に求められる役割の変化

これまで 授業を
コントロール・支配する

これから 授業をコーディネートする・
ファシリテートする



資料2 幼稚園における学習環境整備



これは、教育的にはルソーが『エミール』で描いた世界にもなります。「情報技術パラダイム」は、必ずしも未来のモデルではなかったわけですが、逆に普遍性を兼ね備えていたともいえます。

ところが、小学校に上がった途端「今日はハサミを使います。先生が配りますから、1班の人だけ前にいらっしやい。後の人は自分の席で静かに待ちます」といった抑圧的環境に置かれるのです。子どもたちが、それまで培ってきた主体性も個性も知性も感性もすべて封印し、万事において指示待ちになるのは、無理のないところでしょう。

「令和の日本型学校教育」への第一歩は、「手はお膝、お口チャック」や「生徒になめられない」など、抑圧的な規律訓練型教育との決別から開始されるべきです。

今こそ学びのパラダイムシフトを

ある小学校で、間接光が入る明るい廊下の出窓部分に顕微鏡を4台常時設置し、いつでも使ってよいことにしてみました(資料3)。すると子どもたちは、雪が降れば雪の結晶を観察し、アサガオの花が咲けば花びらを見る、そんな活動を日常的に、ごく自然に行うようになっていきます。顕微鏡は意外ほど壊れることもなく、子どもたちは理科の学習の際、顕微鏡の操作やプレパラートづくりを手際よく進められるようになりました。高学年の子どもが低学年の子どもに顕微鏡をのぞかせてあげるといったことも、日常茶飯事です。1年生の子どもたちは「早く理科の勉強がしたいなあ」と心待ちにするようになったといいます。

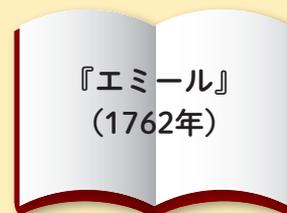
みなさんの学校の顕微鏡は、年間に何日くらい使われているのでしょうか。子どもたちは顕微鏡を、卒業するまでに何回操作するのでしょうか。本当にわずかな日数しか使われない、操作する機会がほとんどないというのが実情ではないかと思えます。そうこうするうちに耐用年数が来て、廃棄になったりもしているでしょう。

GIGAスクール構想により配備された一人一台端末が同様の運命をたどることは、なんとしてでも避けるべきです。そのためにも、学校における学びのパラダイムシフトが、今こそ切実に求められているのです。

ルソーが『エミール』で描いた教育



ジャン・ジャック・ルソー
(1712年~1778年)
フランスの哲学者



子どもは
自然に学習し、
成長していく存在



教育においては、
指示し過ぎず、
その成長を見守り、
寄り添う姿勢が大切!

ルソーはこれを
「消極教育」と呼んだ

資料3 いつでも自由に使える顕微鏡

